第三部　誌上討論①

妓楼遺構をめぐる記憶
――トラウマの視点から

金井　聡・宮地　尚子

はじめに

何かを記憶することは、同時に膨大な出来事が忘れられるということでもある。私たちは、ある過去の出来事を社会的に表象するとき、断片的な細かい情報をつなぎ合わせて一つのストーリーをつくりあげる。それは、現在の時点における一般的な価値観や社会的な基準に基づいて、過去を再構築することでもある(1)。人見論文からは、遺構の保存と活用をめぐり、時代ごとに人々のさまざまな思惑や利害の交錯を見ることができる。本稿では、人見論文への応答として、妓楼遺構をめぐる記憶について、ケネス・E・フットやマリタ・スターケンの論考のほか、宮地の環状島モデルを手がかりに、トラウマという視点から考察してみたい。

景観の変容

ケネス・E・フットは、暴力や悲劇が長期間にわたって景観を変容していく過程をとおして、社会的な記憶がいかに構築されるのかを論じている。フットは、アメリカ社会の歴史においてトラウマ的な出来事が起きた場所を取り上げ、その痕跡が景観にどのように刻まれているかを、「聖別」、「選別」、「復旧」、「抹消」という四つの分類によって考察した(2)。「聖別」においては、ある事件やその犠牲となった殉教者や集団を神聖化し、儀礼的な意味を場所に持たせ、永久的な維持管理を前提として記念碑や慰霊碑などが建てられる。「選別」では、重要な場所として記念行為の対象にはなるが、積極的な神聖化はされない。「復旧」は、悲劇に見舞われた場所が事件前の通常の状態に戻され、再び使用されるプロセスを指す。「抹消」は、悲劇を覆い隠し、景観から除去するためにあらゆる痕跡を積極的に消し去ることを意味する。フットによると、あらゆる悲劇の場所がこれら四分類のいずれかに当てはまるとは限らず、その場所の扱いや解釈が時代とともに変化することも稀でないという。さらに、景観には人々がその場所をどのように解釈したいと願っているかというメッセージが包摂され、その時代の政治的、経済的、社会的な価値観に見合ったパターンが求められるという。

人見論文によると、妓楼遺構の保存をめぐっては、一九九〇年代には文化財としての希少性やノスタルジックな文脈で再評価される一方で、二〇〇〇年代までは、性売買の歴史や女性の尊厳への配慮がみられていた。ところが二〇一〇年代になると、観光やまちづくりの資源、福祉サービスの拠点にも置き換えられるなど、妓楼遺構の再生や保存が、性売買の歴史的文脈から切り離されて論じられるようになっていくという(3)。それらは、トラウマ的な出来事が景観にどのように刻印されたり、抹消されたり、変容してきたのか、という過程にも重なる。時代ごとの社会の悲劇と暴力に対する向き合い方を鮮明にあらわしているといえるだろう。

スクリーンと隠蔽

マリタ・スターケンは、ベトナム戦争における個人的、集合的記憶がいかに覆い隠され、特定のストーリーがつくられていくのかを論じるにあたって、スクリーンという概念を用いている(4)。スクリーンとは、そこに何かが投射されることもあれば、視界を覆って何かを隠したりすることもある、多義的なものである。一九八二年にワシントン・モールに設立されたベトナム戦争記念碑（Vietnam Veterans Memorial）は、いかに戦争が記憶されるべきか、という論争の焦点となった(5)。

この記念碑は、黒い御影石からなる二つの壁が傾斜面を利用して地下にのめりこむようにつくられたこと、しかも設計者が当時二一歳の中国系アメリカ人の女子学生という、アメリカ社会における周縁的存在であったこともあいまって、一部の帰還兵から「恥辱と悲しみの黒い傷あと」「みじめな溝」「侮辱の一撃」などの非難を引き起こした。スターケンはここに、黒い壁を恥辱に満ちたものとする人種差別的な解釈と、女性化された大地を力の欠如とみなす性差別的な解釈が組み合わされていたと指摘する。

デザインが公募されるにあたっては、戦死者や戦闘中に行方不明になった人々の名前を刻むことと、政治的な意味をもたせず周囲に溶け込むようにすることの二点が条件として課されたという。勝利を賛美するモニュメントではなく、戦争で犠牲となった米軍兵へのメモリアルとして記念碑が設立されたことは、死者たちへの追悼と深い悲しみをあらわすと同時に、なぜこの戦争が起きたのか、なぜ多くの尊い命が失われてしまったのかを、あらためて人々に考えさせる効果をもった。

記念碑が設立されて以降、この二つの壁は贖罪や哀悼、悲嘆の公認など、戦争や戦争で亡くなった人々の経験に対する無数の記憶が投影されるスクリーンの役割を果たしてきた。同時に壁は、ベトナム戦争がもたらした傷を覆い隠すスクリーンとしても働き、雑誌や関連グッズ、旅行などの商品化にみられるよ

うな、ある種のノスタルジーとして利用される側面を持っていた。

戦禍や自然災害などが相次ぎ、未来へのポジティブなイメージを抱きにくい現代的な状況において、過去への憧憬やノスタルジーが世界的に広がりつつあることが指摘されている(6)。妓楼遺構がノスタルジックな文脈で人々の関心を集めている背景には何があるのか。妓楼遺構の保存と活用をめぐる人々の動きからは、近代日本の公娼制度下で、女性たちの人権や尊厳が公然と棄損されてきた歴史や、性売買が行われてきたことへの地域社会のスティグマが、スクリーンの裏側に隠れている。

環状島の「内海」

トラウマをもたらす悲惨な出来事は、今もなお、絶え間なく起き続けており、伝達不可能なことを言葉にしようとする矛盾は常に存在する。また、生き延びた当事者、家族や遺族、支援者、研究者やジャーナリストなど、さまざまな立場の人々が、トラウマについて語ろうとすればするほど、発話者の立ち位置とトラウマ的な出来事との距離、語られる内容の軽重や信憑性などが測られることになる。ジュディス・L・ハーマンが、心的外傷の研究には「被害者の発言の信頼性をくつがえし被害者を消し去ろうとする傾向性とのたえざる戦いとなる必然性がある」(7)と記しているように、トラウマを消し去ろうとする力動は常に働いている。こうした状況に抗して、トラウマについて語る声が公的空間でどのように立ち現れるのか、関係者のポジショナリティと力動を理解するための一助として、宮地は環状島モデルを考案した(8)。

環状島は、中心に沈黙の「内海」をもつドーナツ型の島である。「内海」には、あるトラウマについて語ることのできない犠牲者や声をあげられない当事者たちが沈んでいる。島の「尾根」には声をあげてトラウマについて発信しようとするサバイバーと支援者が立っている。そして、島の「内斜面」には、声をあげられるようになった当事者が「内海」から「尾根」に向かってのぼろうとしている。さらに、「外斜面」には、島の「外海」からこの問題に関心を寄せてたどりついた支援者や研究者などが居る。島の「内海」はそのトラウマへの社会的否認や無理解、偏見が強いときには、「水位」が高くなる。また、島の上空には「風」(人間関係の混乱や軋轢)が吹き、「尾根」や「内斜面」「外斜面」にいる人たちを「内海」と「外海」へ押し戻そうとする。さらに、トラウマがもたらす反応として「重力」も働く(9)。

遊郭という環状島を浮かび上がらせることで、梅毒の症状が進行していたにもかかわらず、借金返済のために廃業もできなかった娼妓(小梅)(10)を、「内海」の奥底に沈められてきた一

人としてとらえることができる。娼妓という立場や性にまつわるスティグマゆえに、「内海」の「水位」は高くなり、住み替えや金銭工面の要望が通らなかったように、「内斜面」をのぼることができない。自分の声が他者に伝わらない状況が続けば、虚しさや無力感として「重力」が生じ、「内海」の底へと押しとどめる役割を果たすであろう。この環状島の外側には、帝国主義下の公娼制度や女性差別など、より大きな環状島を見出すこともできそうだ。

島の外側からやってきた「外斜面」の人々は、「内海」の中心にあるトラウマの核心に近寄ることはできない。だが、「内海」のかすかな声に耳を傾け、環状島を浮かび上がらせることは可能であろう。さらに、島の外側から「内斜面」にいる人たちにむけて有益な知識や情報を持ち込んだり、その問題に関心がない人々へ働きかけることは、「内海」と「外海」の「水位」を下げるかもしれない。それらは、「内海」に沈んでいる人たちが「内斜面」をのぼって声をあげるのを助けることにもつながる。現代に生きる研究者も時空を越えて、過去の「内海」からの声に耳を傾け、「外斜面」から「外海」に向けて発信したり、環状島全体を俯瞰して冷静な見解を示すことができる。

おわりに

妓楼遺構をめぐる記憶について、景観に刻印されたメッセージ、スクリーンによる隠蔽、環状島という概念を手がかりに考察した。何がどのように記憶され、その一方で何が忘却されていくのか、景観や遺構の保存と活用をめぐる問題は、さまざまな利害関係が入り組んで複雑化しやすいことを、人見論文が詳細に描いている。トラウマ的な出来事の中心に埋もれた当事者の姿に近づくのは困難であるが、それゆえ、娼妓の手紙という一次資料を発掘し、内容を丁寧に検証する試みは、何がスクリーンの裏側に隠され、忘却されてきたのかを明らかにする一歩でもある。歴史研究には、そのような意義も含まれている。

註

（1）Maurice Halbwachs, 1925 *LES CADRES SOCIAUX DE LA MÉMOIRE*, Librairie alcan（鈴木智之訳、二〇一八、『記憶の社会的枠組み』青弓社、四一）

（2）Kenneth E. Foote, 1997 *Shadowed ground: America's landscapes of violence and tragedy*, University of Texas Press（和田光弘他訳、二〇〇二、『記念碑の語るアメリカ―暴力と追悼の風景』名古屋大学出版会、七―三三）

（3）人見論文を参照。

（4）Marita Sturken, 1997, *Tangled Memories : The Vietnam War, the AIDS Epidemic, and the Politics of Remembering*, University of California Press（岩崎稔、杉山茂、千田有紀、高橋明史、平山陽洋訳、二〇〇四、『アメリカという記憶―ベトナム戦争、エイズ、記念碑的表象』未來社、八五―一五〇）

（5）宮地尚子、二〇二二、『傷を愛せるか（増補新版）』筑摩書房、二〇〇―二一三

（6）Zygmunt Bauman, 2017, *Retrotopia*, Polity Press Ltd.（伊藤茂訳、二〇一八、『退行の時代を生きる―人びとはなぜレトロトピアに魅せられるのか』青土社）

（7）Judith Lewis Herman, 1992, *Trauma and Recovery*, HarperCollins Publishers,（中井久夫訳、一九九九、『心的外傷と回復【増補版】』みすず書房、五）

（8）宮地尚子、二〇〇七、『環状島―トラウマの地政学』みすず書房、九―一三

（9）上掲、二七―三一

（10）人見論文を参照。